

ゴンザの生涯と業績を解明するために（Ⅰ）

- 1 「ゴンザ」研究の手引
(付, 畧年表と関係文献リスト)

網 屋 喜 行

- 2 世界最初の露和辞典をつくった薩摩の若き漂流民ゴンザのこと

吉 村 治 道

「ゴンザ」研究の手引

(付, 畧年表と関係文献リスト)

網 屋 喜 行

1738年(元文3, 8代将軍吉宗の時代), 薩摩出身の弱冠20才の漂流民ゴンザが, ボグダーノフの指導をうけて, 世界最初の露和辞典を, ロシアのペテルブルグで完成させた。

それから220年余りが経過した1963年10月, 順天堂大学(当時, 後~九州大学)村山七郎教授が, 鹿児島大学で開催された第18回日本人類学会・日本民族学協会連合大会で, ゴンザの生涯と業績について報告を行った。そして, 昨1994年3月23日, ゴンザの遺稿全6点7冊のマイクロフィルムが, ロシアの東洋学研究所ゴレグリヤード教授から, 呉服商吉村治道氏に手渡され, 同氏は翌日それらを県立図書館に寄贈した。

こうした一連の出来事は, 本県の文化史上, 特筆大書すべき事実であって, 長く記憶にとどめられて然るべきであろう。そこで, ゴンザの生涯・業績とそれらを日本に伝えるのに大きく貢献した3人の人びとのことを, 書いてみる。

まず, ゴンザである。「権左」とか「権蔵」とか音訳されているが, 正確なところは判らない。というのも, ゴンザに関する薩摩側の資料が, 今のところ, ほんの一片も発見されていないからである。しかし, 幸いなことには, 前記のボグダーノフ(Богданов, А. И)が, ゴンザとその年長の同僚ソウザから, 彼等の薩摩出帆以降の事情を聴きとり, それを2本の論文にまとめていた(1737年)ので, その辺の事情を大筋たどることができる。このボグダーノフ論文のうち第1のものは, 後に, ロシアの地理学者クラシエニンニコフ(Крашенинников, С. П)の著書「カムチャッカ地誌」(1755年)に, 脚注として収録され, 今日に伝えられている。即ち「1729年の夏, カムチャトカ半島ロパトカ岬とアワチヤ湾との間で日本の船が漂着した。それには17名が乗っていた。また, いくつかの商品が積んであった。しかし, それらの不幸な人々は2人をのぞいて, その地方に居あわせたコサック50人隊長シュティンニコフによって殺されてしまった。…この船は日本語でファヤンク丸と呼ばれ, 薩摩国から出帆した。米, 絹織物, 紫檀, 書きもの用紙, その他のものを積んでアザカ(大坂)町へ向かった。初めは順調に大洋に向かって進んだが, それから激しい悪天候に苦しみ, 悪天候のために彼らは大海に押し流され, どこがどこやら判らなくなってしまった。風の吹くまゝに6ヵ月8日間漂流した。11月8日から6月7日まで。…」(村山教授の訳)。つまり, ゴンザは, 1728年(享保13)11月8日, 17名乗り組みの「ファヤンク丸」(後述のミュレルによると「ワカシワ丸」)の一員として, 薩摩のある港から出帆して, 大坂に向ったところ, 船が嵐にあって太平洋を漂流し, 翌年6月7日, カムチャッカ半島南端に漂着した。しかし, 17名のうちゴンザとソウザの2人だけが生き

残ったのである。

その後、2人はペテルブルグに送られて、女帝アンナ・ヨヴァノヴナに拝謁し、ロシア正教に入信し（ゴンザの洗礼名はデミアン・ポモルツェフ、ソウザはコシマ・シュリツ）、勅令で日本語学校教師となった（主幹～ボグダーノフ。生徒2名～シェナヌイキンとフェーネフ。この2人は、1742年、スパンベルグ探検隊通訳として、日本に接近した）。

1736年9月、ソウザは43才で没する。あとに残されたゴンザは、科学アカデミー図書館司書補ボグダーノフの指導で、露和辞典の編集を開始し、1738年10月、「新スラヴ・日本語辞典 Новый Лексикон Славено-Японский」（世界最初の露和辞典、正確にいうと露薩辞典で、1万2千のロシア語に、18世紀前期の薩摩方言を対応させている）を完成させた。しかし、1739年（元文4）12月15日、ゴンザは、今回里帰りした多くの著作（前記辞典の他に、①露日語彙集〔アルファベット順・項目別〕、②日本語会話入門、③簡畧日本文法、④友好会話手本集、⑤コメニウス著「図解感覚世界」の翻訳）を残して、この世を去った。僅か21才であった。

ゴンザの業績は偉大の一語に尽きよう。後年、ロシアの東洋学者バルトリド（Бартольд, В. В.）が、「天才」と讃えたのは理由のあることである。とはいえ、少年ゴンザの才能を発見して指導し、更に、漂流事情などを聴きとって、論文を執筆した・ボグダーノフがいなかったならば、ゴンザは、一介の漂流民として、確実に、歴史の彼方に消え去っていたことだろう。ゴンザにとって、ボグダーノフは最大の恩人といって過言ではあるまい（なお、ボグダーノフのもう1つの論文は、ミュレル〔Müller, G. F.〕の著書「ロシア史集成」〔1764年〕に、利用されている）。

ところで、我々は、ゴンザの仕事を日本に伝えた2人の人びとを、記憶しておく必要がある。

第1は村山七郎教授である。同教授は、永い間埋もれていたゴンザの生涯と業績を再発見して、わが国に紹介したのである。

実は、ゴンザの漂流は、明治中期から昭和初期にかけて、何度か、わが国の文献に、他の項目と併記した形ではあるが、登場していた、即ち、1884年（明治17年）－外務省記録部編「外交志稿」、1909年（明治42）－柄内曾次郎編「洋人日本探險年表」（増修版－1929年昭和4）、1922年（大正11）－播磨檜吉の論文「露国に於ける日本語学校の沿革」、1930年（昭和5）－田保橋潔「近代日本外国関係史」（増訂版－1943年昭和18）。例えば、「外交志稿」は次のように記述していた。「享保十四年^{西暦一千七百三十九年}七月薩摩若島丸一船風ニ逢フテ露国東察加ノ海岸ニ漂着シ土人ノ為メニ害セラレ所左権左ノ二人僅ニ生命ヲ全ウシ彼得堡ニ送ラル^{米国人所著日本人漂流記}」（卷之十四、漂流篇第三、420頁）。しかし、残念乍ら、これら、記述はいずれも、当時の鹿児島県関係者の関心を惹かなかった模様で、本県関係者がゴンザの存在に注目するためには、約20年の歳月と村山教授をまたなければならなかったのである。即ち、村山教授は、1963年、ゴンザの遺稿3点を、ドイツのゲッチンゲン大学

「アッシュ・コレクション」で発足し、以後、ゴンザの生涯と業績について、学会報告・論文・著書・講演を通じて、精力的に、わが国に紹介し続ける。こうして、漸く、本県関係者が、その著作の中で、ゴンザに言及するに至る（例えば、1963年－寺師若法師，1967年－木崎良平，1974年－宮下満郎，郡山良光）。これらの著作はいずれも、村山教授の紹介論文に依拠するものであったが、木崎氏を除く3氏は、村山教授が紹介したゴンザの言葉に着目して、ゴンザの「出身地」の推定を試みていた（寺師－阿久根市大川の尻無，宮下－北薩地方，郡山－薩摩〔恐らく北薩〕の漁民の方言）。

さて、村山教授は、1985年、ゴンザ辞典の日本版を編集して、「ナウカ」から刊行し、更に、1992年、東洋学研究所から入手していたゴンザの遺稿4点のマイクロフィルムの複製について、県立図書館の要請を受け入れた。その結果、県立図書館は、前述の著作のうちの①・②・④及びゴンザ辞典について、そのマイクロフィルムを所蔵するに至った。

第2は吉村治道氏である。20才台のはじめの4年間を、シベリアで「捕虜」生活を送った経験をもつ・同氏は、ゴンザの全遺稿をマイクロフィルムの形で、多年の努力の末に帰郷させた。それだけでなく、同氏は、「ゴンザ研究」の組織者でもある。

吉村氏は、1985年、村山教授が黎明館で行った講演で、ゴンザのことを知り、その後1993年6月まで約7年間、ゴンザの遺稿の里帰りを、ソ連のゴルバチョフ大統領とロシアのエリツィン大統領に訴え続け、遂に、昨年1994年3月、私費を投入して、遺稿のすべてをマイクロフィルムで帰郷させることに成功したのである。その後、同氏は、6月10日、本学の第1回金曜講演会で、「世界最初の露和辞典をつくった・薩摩の若き漂流民ゴンザのこと」と題して、講演を行い、80名をこす来聴者に深い感銘を与えた（吉村氏による別稿は、当日の講演を基調にしている）。更に、同氏は、「ゴンザ研究の促進」のため、他の3氏と共同で、「ゴンザ」ファンクラブの結成を呼びかけ、11月20日、約120名の市民の参加で、同クラブを発足させた。同クラブは、謎に包まれている・ゴンザの「出身地」と「出港地」の割り出しに努めている。即ち、「出身地」は、ゴンザ辞典が収録している薩摩方言の分析を通じて、解明しようとしている。また、「出港地」については、藩政時代の海運システムと当時の帆船の航路を踏まえつつ、探り当てようとしている。出港地の検討には、ゴンザの出港から80余年後に発生した「永寿丸」漂流事件が、参考になる。25名乗り組みの同船は、1812年（文化9）10月、米1400石余りを積みこみ、江戸へ向けて、川内の船間島（薩摩藩が、江戸・大坂等へ物資を移出する際の中継基地）を出港し、阿久根の脇本（藩の内外に出入りする船舶の通関手続を行う津口番所が置かれていた～木場武則氏、川内川の水運）に寄港した後、玄界灘・瀬戸内海を経て航行中、紀州沖で遭難し、翌年9月、千島ハラマコタン島に漂着した。喜三左衛門等3名は、1817年、帰郷して、三通の口書を残している。しかし、ゴンザの場合は、大坂が目的地であったから、瀬戸内海航路を取る限り、太平洋中心部への漂流は想定しにくく、永寿丸とは別の航路（佐多岬→太平洋→足摺岬・室戸岬→大坂）を選択した可能性が高いとの指摘がある（1992年5月29日、

K T S 番組)。なお、同クラブは、来たる 2 月 19 日に研究集会を開く。テーマは、「ゴンザの出航地と航路を探る」であって、報告者は、鹿児島大学法文学部原口泉助教授と水産学部練習船「かごしま丸」二等機関士田中久雄氏が予定されている。我々としては、こうした取り組みで、ゴンザの謎が一日も早く解明されることを、期待して止まない（1995・1・17）。

付

1. 畧年表「ゴンザの薩摩出帆からファンクラブの結成まで」

1665年(元禄 8)	コサックの長アトラソフ、カムチャッカ半島の要塞に着任 大坂の伝兵衛等13名、カムチャッカ南部に漂着
1702年	日本語教室、ペテルブルグに開設（教師～伝兵衛）
1710年	紀州の三右衛門（サニマ）等10名、カムチャッカ東海岸に漂着
1728年(享保13)11月 8 日	ゴンザ等17名乗組のファヤンク丸（ワカシワ丸） 大坂に向け出帆、嵐にあい太平洋漂流
1729年 6 月 8 日	ゴンザ等、カムチャッカ南部に漂着
7 月	コサックの襲撃で15名死亡
1731年	ゴンザとソウザ、ヤクーツク・トボリスクを経てモスクワへ
1734年	両名、ペテルブルグへ。女帝に拝謁。ロシア正教の受洗
1735年	科学アカデミーでロシア語文法を学ぶ
1736年	女帝の勅令で日本語学校教師となる （主幹～ボグダーノフ、生徒～シェナヌイキンとフェーネフ）
9 月18日	ソウザ没す（43才）
同 28日	ゴンザ、ボグダーノフの指導で露和辞典の編集開始
1737年	ボグダーノフ、ゴンザ等の漂着事情等について、論文 2 本の執筆
1738年10月27日	「新スラヴ・日本語辞典」の完成
1739年(元文 4) 7 月18日	元老院から「年俸100ルーブル支給」の辞令
12月15日	ゴンザ、多くの著作を残して没す（21才？） 蠟製の首像つくられる
1742年	ゴンザの生徒 2 名、通訳としてスパンベルグ探検隊に参加、日本に接近
1745年	陸奥の竹内徳兵衛等11名、オンネコタン島に漂着
1754年	日本語学校、イルクーツクに移設（1816年閉鎖）
1755年	クラシェニンニコフ著「カムチャッカ地誌」の刊行
1764年	ミュレル著「ロシア史集成」の刊行
1783年	伊勢の大黒屋光大夫等17名、アムチトカ島に漂着

1792年（寛政4）	ラクスマン，通商を求めて根室に来航 光大夫等3名帰国
1794年5月	石巻の津大夫等16名，アツカ島に漂着
8月	桂川甫周，將軍の命で「北槎聞畧」の編集
1805年	津大夫等4名，帰国
1807年	大槻玄沢編「環海異聞」の完成
1963年	順天堂大学村山七郎教授，ドイツ，ゲッチンゲン大学「アッシュ・コレクション」から，ゴンザの遺稿3点発見
10月	村山，人類学会等で，ゴンザの業績につき報告
1965年6月	村山，科学アカデミー東洋学研究所レニングラード支部で，2人の首像確認 ゴンザ遺稿4点のマイクロフィルム入手
1985年5月	村山編「新スラヴ日本語辞典：日本版」の刊行（ナウカ）
11月9日	村山「薩人ゴンザと露日辞典」と題して講演（於黎明館） 吉村治道，この講演でゴンザのことを知る 県育英財団，ビデオアニメ「ゴンザとソウザ」を県内教育委員会に配布
1986年3月	吉村，ゴルバチョフ大統領に，手紙で，ゴンザ遺稿の里帰りを要請（以後，93年6月まで続ける）
5月29日	K T S「ゴンザ・ロシアに渡った薩摩の漂流民」放映
1992年6月	県立図書館，村山入手のマイクロフィルムを複製（9月一般公開）
8月	県立図書館，村山入手の「アッシュ・コレクション」所蔵ゴンザ遺稿のコピーにつき複製
10月～11月	県立図書館，「世界の冒険者たち」展で，ゴンザコーナーの設置
1993年7月	吉村，東洋学研究所から「遺稿のコピーは可能」の回答を受ける
8月	吉村，コピー料の送金（送料込み6万円）
1994年3月23日	吉村，ゴレグリヤード教授から，遺稿（6点7冊）のマイクロフィルムを受領
24日	吉村，マイクロフィルムを県立図書館に寄贈
5月6日	吉村，コピー料の追加送金（1万7千円）
27日	県立図書館，吉村寄贈マイクロフィルムの正式受け入れ・感謝状の贈呈
6月10日	吉村，県立短大金曜講演会で，「世界最初の露和辞典をつくった・薩摩の若き漂流民ゴンザのこと」と題して講演（来聴者80名以上）

- 9月17日 村山, ゴレグリヤード, 「鹿児島とロシアーゴンザとソウザの業績を通じて」と題して講演 (於中央公民館, 来聴者1100名)
- 11月20日 「ゴンザ」ファンクラブの結成 (於鹿児島短大)
事業計画・規約等の決定
吉村・会長に就任 (会員数125名)

2. 「ゴンザ関係文献」リスト

1) ゴンザの著作

1736年

i. 露日語彙集

- { アルファベット順
- { 項目別 (村山七郎訳, ⑪所収)

ii. 日本語会話入門 (Преддверие разговоров японского языка) (村山訳, ⑪所収)

1738年

iii. 簡畧日本文法 (Краткая Грамматика) (村山訳, ⑫所収)

iv. 新スラヴ日本語辞典 (Новый Лексикон Славено-Японский) (村山編, ⑫)

1739年

v. 友好会話手本集 (Дружеских некоторых разговоров)

vi. コメニウス「図解感覚世界」(Orbis pictus) の翻訳

2) ゴンザ関係文献

i. 外国編

1737年

ボグダーノフ (Богданов, А.И)

- ① 日本人たちについての簡単な報告—彼らは、いかにして、ロシア帝国にたどりついたのか (村山訳, ⑫所収)
- ② サンクトペテルブルグにいた2人の日本国家の人についての簡単な報告—両人はキリスト教信仰のための洗礼を受け、洗礼名を第1の者はコシマ、第2の者はデミアンという (Краткая Ведмость о Бывших здесь в Санкт-Петербург японского государства двух человек, которые крещены в христианскую веру, Имена им по крещении первому Косьма, второму Демиан)

1755年

③クラシェニンニコフ (Крашенинников, С.П)

カムチャッカ地誌 (Описание земля Камчатки)

第 2 巻 222頁～225頁の脚注 (村山訳, ⑮所収)

1764年

④ミュレル (Müller, G. F)

ロシア史集成 (Sammlung Russischer Geschichte)

第 3 巻 127頁 (村山訳, ⑰所収)

1881年

⑤ノルデンショルド (Nordenskiöld, N. A. E)

ヴェガ号のアジア・ヨーロッパ周航 (The Voyage of the Vega round Asia and Europe)

第 2 巻 181頁～182頁

1911年

⑥バルトリド (Бартольд, В. В)

ヨーロッパとロシアにおける極東研究の歴史 (История изучения Востока в Европе и России)

389頁～392頁 (外務省訳, ⑫所収 生活社訳, ⑬所収)

1930年

⑦ドストエフスキー (Dostojewsky, M)

ロシアの太平洋進出と日本との最初の出会い (Russlands Vordringen zum Stillen Ozean und seine erste Berührung mit Japan)

Neue Folge 2. Jahrgang 1930. Heft4-6 seite 13

(村山訳, ⑰所収), Berlin

ii. 日本編

1884年 (明治17)

⑧外務省記録部編, 外交志稿

卷之十四, 漂流篇第三, 420頁

年表 289頁

1909年 (明治42)

⑨枅内曾次郎編, 洋人日本探險年表 (私刊)

(増修版—1929年〔昭和4〕3月, 岩沼書店 56頁, 57頁, 130頁, 131頁)

1929年 (大正11)

⑩播磨檜吉, 露国に於ける日本語学校の沿革

(「史学雑誌」第33巻第10号, 791頁～800頁)

1930年 (昭和5年)

- ⑪田保橋潔，近代日本外国関係史（刀江書院）71頁～74頁
（増訂版－1943年（昭和18）12月，刀江書院，68頁～70頁）

1937年

- ⑫バルトリド著⑥和訳本（外務省）

1939年

- ⑬バルトリド著⑥和訳本（生活社）

1963年

- ⑭寺師若法師，村山教授との対談（要点）
（「さんざし」昭和48年12月号，20頁～22頁）

1964年 5 月

- ⑮村山七郎，薩摩漂流民ゴンザ（権左）の事蹟
（「日本歴史」192号，55頁～68頁）

8 月

- ⑯荒川秀俊，日本人漂流記（厚徳社），57頁～60頁

1965年 3 月

- ⑰村山，ゴンザの伝える18世紀前半の薩摩方言
（「漂流民の言語」吉川弘文館，所収，21頁～128頁）

11月

- ⑱亀井高孝・村山，日本漂流民とクンスト・カメラ
（「日本歴史」210号，2 頁～7 頁）

1966年

- ⑲井上靖，おろしや国酔夢譚
（「文芸春秋」2月号，381頁～382頁）

1967年

- ⑳木崎良平，ロシア史随想（明玄書房） 156頁～159頁

1969年

- ㉑村山，権左（ボモルツエフ），A. ボグダーノフ共著簡畧文法について
（九大文学部「文学研究」66）

1971年

- ㉒村山，新スラヴ・日本語辞典における18世紀初めの薩摩方言語彙
（「文学研究」68）

- ㉓同上 ロモノーソフ以前の二つのロシア文法
（九大文学部言語学研究室）

- ㉔高野明 日本とロシア（紀伊国屋書店） 37頁

1974年 3 月

②⑤宮下満郎，薩摩の漂流民たち

（「甲南紀要」第9号，141頁～145頁）

12月

②⑥郡山良光 日露関係研究史序説

（鹿児島短期大学「研究紀要」14，23頁～42頁）

1985年

②⑦村山編，新スラヴ日本語辞典・日本版（ナウカ）

1991年

②⑧木崎良平，漂流民とロシア（中公新書），26頁～33頁

1993年

②⑨村山，漂流民が語る日本とロシア（インタビュー）

（石井研堂これくしょん，「江戸漂流記総集」第6巻，日本評論社，26頁～35頁，48頁～51頁）